東京大学駒場博物館所蔵品展

饅頭・柏・オリーブ

山口進の画業と交友

山口進「猫」昭和三三年

二〇一四年三月三日（月）～四月一一日（金）

開館時間：一〇時～一八時（入館は一七時三〇分まで）

休館日：土・日・祝日

主催：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館

山口進は東京大学教養学部の正門をデザインした人物です。柏の葉とオリーブの意匠、旧制第一高等学校の校章が埋め込まれた正門は、昭和13年に完成しました。

一箱の饅頭をきっかけとして、大正14年末から一高に勤務していた山口は、この時既に版画家としても活躍していました。国内外の版画展等に出品するなど、精力的な活動を行っており、その実力を買われ、起用されましたものと思われます。

山口の携わった堅固な造りの堂々たる正門は、それ故に一高生の伝統を揺るがす事件をも巻き起こしました。

一高職員、山口進の画業と交友を通して見えてくる、一高の様相をお楽しみ下さい。

問い合わせ先　東京大学駒場博物館
住所：一五三―八九〇二　東京都目黒区駒場三―八―一
電話：〇三―五四五四―六一三九　FAX：〇三―五四五四―四九二九
ホームページ：http://museum.c.u-tokyo.ac.jp

THE UNIVERSITY OF TOKYO
KOMABA MUSEUM

饅頭・柏・オリーブ

山口進の画業と交友

はじめに

山口進は東京大学教養学部の正門をデザインした人物です。柏の葉とオリーブの意匠、旧制第一高等学校の校章が埋め込まれた正門は、昭和13年1月下旬に完成しました。版画家としても活躍していた山口は、一箱の饅頭をきっかけとして一高に勤務し始めました。

力強くも愛嬌がある彼の作品は、当館を始め、国内外の様々な美術館に収められています。本展では、山口進を通じて一高の教員や生徒の生活など、様々な姿をお伝えします。

なお開催に際して、山口進作品及び関連資料を御寄贈下さった山口歩氏をはじめ、多くの方々の御協力を得ました。末筆ながら御厚意に感謝申し上げます。

山口進について

明治30年1月25日、長野県上伊那郡東箕輪村に生まれる。独学で絵を学ぶが、23歳の時に上京し、葵橋洋画研究所に入所。黒田清輝らから指導を受ける。大正14年12月16日付で一高寮務掛として雇用される。齋藤阿具、杉敏介、森巻吉ら一高の教授と親交を深め、肖像画などを描き、駒場正門のデザインをしたといわれる。昭和20年に一高を退職後、郷里に帰り、長野の山々や高山植物などを画題とした個性的な作品を精力的に発表し、日本版画協会より名誉会員に推挙される。昭和58年11月25日急性肺炎のため死去。86歳。

Ⅰ　山口進と一高

山口進が一高に奉職したきっかけは、一箱の饅頭であった。ある家の門前に置かれていた饅頭には、「ご自由にどうぞ」と記された札が添えられていた。若き日の山口は、それを欲したが、兎も角も、挨拶をする必要があろうと、その家を訪れた。応対に出てきたのは、齋藤阿具の血縁者であった。山口が清貧の画家であることに興味を持った某氏が、当時一高の教頭であった阿具に推薦したといわれている。その家は、かつて夏目漱石が住み、『吾輩は猫である』を執筆した場であった。阿具と山口による黒猫の掛け軸（Ⅱ-12）は、この奇縁を書き表したものである。

1　山口進（写真）

一高在職頃の山口進。

2　職員進退

山口進の履歴書。大正14年12月16日付で、一高寮務掛として月俸60円で雇用された。当時の校長は杉敏介、教頭は齋藤阿具。

Ⅰ-1

3　寮務課日誌（複製）

昭和20年、退職直前の当直日誌。連日、敵機が来襲し、緊迫した状況下であった。

4　齋藤阿具（写真）

山口進の描いた肖像画を絵はがきにしたもの。

斎藤阿具は日蘭交渉史を専門とする歴史学者である。明治23年一高文科卒、明治40年一高就任、昭和8年離任。

5　齋藤阿具『西力東侵史』（明治35年）

6　齋藤阿具『西洋文化と日本』（昭和16年）

7　齋藤阿具『地名人名英独仏語対照表』（昭和15年）

8　齋藤阿具『ヅーフと日本』（大正11年）

（6～9　東京大学駒場図書館一高文庫蔵）

9・10　杉敏介（写真・ハガキ）

杉敏介は明晰な頭脳と洒脱な性格を兼ね備えた教育者であり、新体詩人でもあった。山口への書簡にも、ユーモラスな詩を寄せている。明治32年一高就任、昭和4年離任。

11　『一高同窓会々報』（昭和13年6月）

山口進画、杉敏介肖像画（油絵）についての記事。

12　杉敏介『南山歌集』（昭和24年）

杉敏介の喜寿を記念して出版された歌集。山口進への画賛も多数記されている。

「（昭和三年）二月十九日、山口進君自画五六枚持来れるに賛せる中に

蛙　あしを分け水を潜りて飛ぶ蛙とはに撓まぬその歩かな

日出に松に鶴　初日影さして昇れる松かげに千代よぶ田鶴の声長閑なり

夾竹桃に蜂　三伏の夏の暑さも物かはと撓まぬ蜂の努をしぞ思ふ」

「（昭和三年）二月十九日山口進君自画五六枚を持来れるに賛せる中の二首

諏訪湖上のスケートの画に寿々舞と落欵せり、寿つ寿つと舞ひて寿々舞や諏訪の海

喫煙しつゝ釣垂るゝ人あり、遙に白帆見ゆ、来ぬ魚をまつ帆の浦の夕暮に喫ふや煙草の葉も焦れつゝ」

「（昭和九年）九月九日、曩に山口進君の書きおこせたる半折数様に賛す

激湍に釣する人　たぎおつる岩間すぐ〳〵登る鮎に釣られてひと日暮らす釣人

葡萄とあけび　えびかづらみのりあけびもゑむ頃は野も田も山も賑はひにけり

赤松に葛はふ　老松にはふ葛かづら心せよあまりに寄ればよりどころなし

水中に泳ぐ人魚とる人あり　同じ水に入りてあれども魚取るもあれば泳ぎてにがすもありけり

川舟の上にて風呂に入れり　水の上に浮べる舟に焚ける火に湧きたる風呂に入れる舟人」

「（昭和十二年）四月廿七日菅氏（＊菅虎雄）宅にて山口進君の画数葉に賛す

筍二本生ひ出でたり　あらかねの地をもたぐる勢に天凌ぐべき色は見えけり

枯れかかりたる茄子の木　一しきりちぎりしあとのひやけ茄子これぞ残りの福といふべき

つくしぜんまい、蛙もあり　君が為心づくしのかひなくて山に入りつゝ薇とりけむ

あひるの子四匹　蛭子とて流されしよりあひるの子水かく事は習ひそめけむ」

13　杉敏介年賀状（昭和7年1月1日）

《東京本郷千駄木町三五　山口進様》

謹賀新年　昭和七年元旦

神奈川県鎌倉町浄明寺九十番地　杉敏介

旧臘御芳志奉深謝候。例に依て御一笑まで

さる年に瓦を得たり何事も
かはらさるへきしるしなるらん

＊『南山歌集』にも同句が掲載されている。昭和七年は申年。

「正月山口進君より瓦に鳩の作物を贈られければ
申年に瓦を得たりいつまでもかはらざるべきしるしなるらん」

14　杉敏介書簡（昭和27年2月28日消印）

《長野県上伊那郡東箕輪村長岡　山口進様》

尊書拝読致候。戦災も存せず御帰郷も知らず、数々御辛苦之程、遙察に堪へず候。歌集は廿三年出来の時、亀井君へ申候へども、行かぬ様に付、更に依元君を経て送り候へども、未着にも見え、廿五年上京の際も拝眉出来ず、常に遺憾に存候処、今年賀信を得て、大に安心致候。

歌集は貴画の賛歌ある故、御目にかけたく存候迄に候。然処、戦災其他の御苦心承り、御尤至極に存候。加之、新春には又肺炎に御罹りの由、御若き故、回復も早かるべく候へども、精々御注意肝要に存候。老生も廿年終戦直後、九月十七日大水にて床上浸水に及び、漸く戦災者の中間に入り申訳出来候次第に候。然処、臘月末、急性肺炎に罹り、死損ひ、廿一年五月頃より、漸く起き候へども、老年と物資欠乏にて、廿二年を経て廿三年より、漸く肉つきかけ候次第に候。此節は十四五貫可有之存居候。

貴地方地図によれば、天龍川流域の相当広き処と相見え候へ共、歌会、句会、書会、画会等、催され候由、実に結構なる事と感服致候。弊地方など、全く左様の事無之、恥敷限に御座候。貴画御送被下候との事、是非願上候。

貴画梅の大幅、仙台の梅、関の梅を見て感心し、群楚叢生の態を望みし処、慮外にて失望致候へ共、表装して見候に、頗上出来にて、高逸雅清無類の出来に有之、弊方所蔵中屈指のものに有之候。今更深く御礼申上候。半折の色々は方々に分与致候。

老生は半折に歌、色紙に歌を専ら書き居り候へども、某処にて額をせがまれ候以来、屢執筆致し、又重要なる文章詩句など相認め、稍面白く出来かけ申候。何か出来候はゞ、

差出可申候。余白に今年の駄句を記し申候。

勅題小鳥　飛翔る影は障子を掠めつゝ寒さにきほふ小鳥群かな

八十一　我齢九九になりたる何となく白寿とも見ゆる面白きかな

（これは絵になるか）壬辰　川の上に映る煙突の黒烟是みづのえの龍とやは見ぬ

某氏白はがき　裏白のはがきは正に頂きぬ是正月の趣向なるらん

某氏賀状　賀状来て又欠礼の状来る酒酔はれしか年寄れしか

二月廿七日　九九老叟　敏介

山口進様

15　杉敏介書簡（昭和27年3月18日消印）

《長野県上伊那郡東箕輪村長岡　山口進様》

拝啓　色紙七葉御送被下難有頂戴仕候。耳つくめづらしく覚申候。早春の芽生へ、さもやと存候へども、当地方と違ひ草の名わからず候。名前承知致度候。当地方はあざみ、よもぎ、ふきのとう、野びる、たんぽぽ、なづな、よめな、ひがんばなの青葉、萱草（かんぞう）の芽などに候。子供は雪舟の図をよろこび忽ち写し試み申候。

近々半折の類相試み差出申度存候。折柄、文事俗事輻湊春暖と共に老木も春の芽生えに忙しとや申べき。

御地、巨燵の上にて筆凍るなどゝ有之候ては、老人はとてもたまり申さず候。今年室内の水が一寸凍り候事は、一月中一度有之候。其頃は宮崎、鹿児島恋しく覚え候へども、御地を思へば贅沢に御座候。寒中三十度台、先日之四十度、此頃五十度台に相成り、大に凌よく相成候。午後は薮に入りて何かと致し居り候。栗柿梅茶ある故、仕事は多く候。之も孫等養に候。

当地鉄道は岩徳線とて岩国徳山間、旧街道（山陽道）なみに通り居り候。米川駅あれども、高森近く候故、同駅にて乗降致し候。（＊頭書　梅も今早散り方に候。庭の水仙真盛に候。木瓜はまだ開かず）

海水浴は島田川に沿ひたる道を下り光（ひかり）市に出で、虹ヶ浜にて致し候。その東、室積は美景に候。金さへあればに候。海は太平洋にあらず、瀬戸内海に候故、浪無之池の如くに候。先は御答礼迄。匆々頓首

三月十七日　敏介

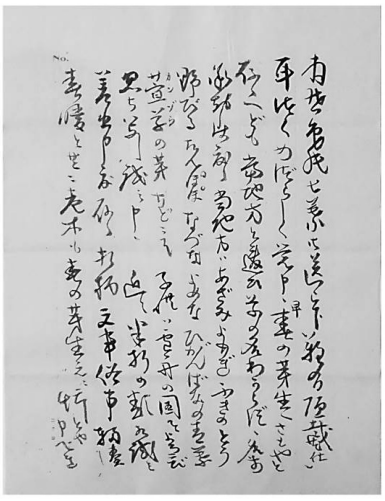
山口進様

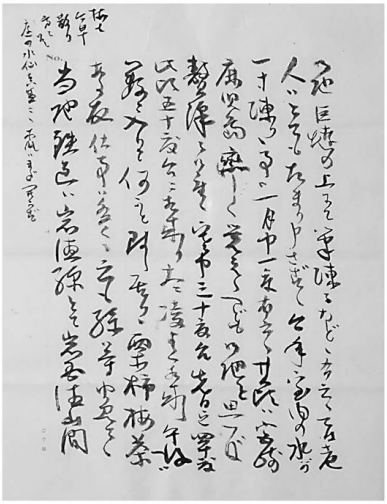
Ⅱ　山口進の画業

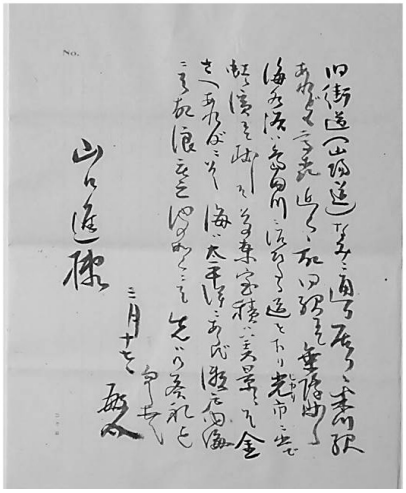
山口版画の特徴は、水分を多く含んだ「びしょびしょ刷り」という手法にある。郷里、長野の自然を取り上げ、硬質の描線に、柔軟な余韻を残した版画は、国内外で高い評価を得ている。また、水彩や油絵にも見るべき作品は多い。

1　猫（昭和33年）

木目と猫の模様が絶妙な一体感を出している。版画ならではの趣向といえよう。（表紙参照）







2　投網（昭和34年）

数種の川魚とタガメが描かれている。背景の模様は、実際の網を用いて作画された。

3　黎明（昭和50年）

夜明けの題名に相応しく、漆黒の夜をこじ開ける朝日の力強さが、深い赤で表現されている。

4　川霧（昭和45年）

山間に立ち上る川霧が、白く厚い靄として浮かび上がる。

Ⅱ-4

5　御来光（昭和15年）

山間に広がる雲海が横長に描かれることでパノラマ的効果が得られ、厚みのある雲海の先に赤い太陽が配されたことで遠近法的効果が得られている。それらが交差し、自然の雄大さを感じさせる作品となっている。

6　駒場本館（昭和13年）

油彩。駒場の正門が完成した頃の作品。現在の一号館。

7　蛙図

杉敏介の書（Ⅱ-8）に画家の山口らしさを付け加えた一文。杉への好誼が伺える。

「世に蛙の如き愚なるもの非ず。然れども道風之に激して名筆たり。芭蕉之に感して俳聖たり。天下何ものゝ師に非ざらんや。

若人を一つの手かきとなしたるも只世の常の蛙なりけり

力なき蛙にちから見出しは人の誠の力なりけり」

8　杉敏介書　蛙の讃（複製）

杉敏介が好んで記した一文。守随憲治『真の教育者　杉敏介先生』（新樹社　昭和48年）にも同文の扇面が掲載されている。なお、『南山歌集』（Ⅰ-13）によると、昭和4年7月の退官時の言葉を基に、昭和11年頃定まった文章だという。

「世に蛙の如く愚なるものあらず。而して道風之を見て名筆たり、芭蕉之を聞て俳聖たり。然らは則ち天下何物か師にあらざらんや。

力なき蛙に力見出てしは、人の誠の力なりけり

心なき蛙の音に天地のふかき心を聞知にけむ

昭和廿八年春日　録旧製　八十二翁敏介」

9　杉敏介書・山口進画

蕪とクワイ、醤油瓶が描かれた山口の絵に、杉の軽妙な句が妙味を出している。昭和三年元旦、一高の年賀交換会において、山口が杉に賛を求めたものである（『南山歌集』）

「この暮はかぶもあがりてぐわゐよし　はばはかりなから

醤油うてくれ　敏」

10　海老

一飛（ひとと）は山口の号。波間をうごめく海老の屈伸が、長い髭と共に描かれている。

Ⅱ-10

11　農作業

山村の農作業の光景を、温かいまなざしで描いた作品。

12　齋藤阿具書・山口進画（昭和11年）

夏目漱石が『吾輩は猫である』を執筆した千駄木の家には、齋藤阿具も住んでいた。「車やの黒」は、作品に登場し、傍若無人な気焔を吐く先輩猫である。

「己あ車やの黒よ　昭和丙子晩春　漱石之遺友　具斎書」

13　年賀状(雀　大正10年　酉年)

14　年賀状(山林散策　昭和24年　丑年)

15　年賀状(酒瓶　昭和34年　亥年)

16　年賀状(旅の子ら集ひ元旦家の味　昭和42年　未年)

17　年賀状（牛）

皇紀2597年か。昭和12年　丑年の年賀状と思われる。

Ⅱ-13

18　白い岩（昭和37年）

春の雪解けの光景であろう。済みきった空の青と山林の緑、日の光に照らされた残雪を頂く岩群の、白と黒のコントラストが目にも鮮やかな作品。

19　水芭蕉（昭和46年）

山口の故郷である長野も、水芭蕉の群生地である。湿地帯に自生し、白い葉と黄色い花を持つ水芭蕉は、明確なコントラストを特徴とした山口作品らしい題材といえよう。

20　龍眼葡萄（昭和45年）

龍眼葡萄は善光寺ぶどうとも呼ばれ、寒さに強い品種である。酸味が明確であり、ワインの原料の他、生食用としても栽培されている。本作背景の黄色が、秋を象徴するぶどうと調和している。

21　二羽の鴨（昭和45年）

猫（Ⅱ-1）と同様に、木目の美しさが際立つ作品。木目の効果から考えると、背景は鴨が水中から飛び出した瞬間の、水面の波紋を見立てたものか。

23『しなの』第1号～第17号(昭和32年～昭和38年)
『まつしま』第130号～第141号(昭和58年1月～12月)

一高退職後、長野に帰郷した山口進の、同県内における活動の一部。『しなの』は信濃毎日新聞社の、『まつしま』は松島工業株式会社の発行誌。

Ⅲ　正門の完成と影響

昭和10年、一高は本郷から駒場に移転した。この時、正門は簡素な造りの丈の低いものであった。山口進のデザインによる堅牢な造りの正門が完成したのは、昭和13年1月下旬のことである。

そして4月27日、正門を乗り越えなかった生徒が、寮の定例総代会で糾弾されるという「越境（越垣）事件」が起きた。当時、一高では「正門主義」が掲げられており、たとえ門限を過ぎて正門が閉まっていても、寮に帰る生徒は、そこをよじ上って入校しなければならない「伝統」があった。しかし、高く頑丈な正門の完成によって、脇の垣根を通り抜ける生徒が現れ始めた。それを伝統の侵害であると考えた寮生と、正門主義そのものを廃止せよという寮生とで、激論が交わされた。

新正門の建造に携わり、寮務掛であった山口進は、この事件をどのような心境で聞いたのだろう。

1　『向陵誌　駒場篇』（昭和59年）

越境（越垣）事件が論題となり、正門主義に対しても賛否入り乱れるなど、会議が紛糾した昭和13年4月27日の寮内定例総代会に関する概略が記されている。第一高等学校寄宿寮編。

2　日誌

昭和13年4月27日、越境事件当日の当直日誌。

「午後七時より総代会有り　翌午前一時半終了」

3　職員進退

山口は寮務掛書記として、昭和13年4月15日、給四級俸に昇進した。

4　建物及工作物配置図（昭和12年3月31日作成）

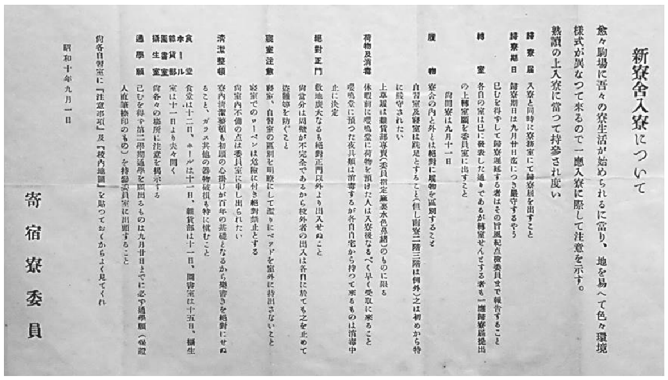
部分。此頃には既に駒場ファカルティ・ハウス(旧同窓会会館)等も建造されていたが、校内西側は図面化されていない。

5　一高航空写真（昭和12年頃）

一高航空写真。まだ簡素な仮正門が写っている。

6　『一高同窓会々報』（昭和11年5月）

この頃はまだ乗り越えやすい仮正門だった。



新寮舎入寮について

愈々駒場に吾々の寮生活が始められるに當り、地を易へて色々環境様式が異なつて來るので一應入寮に際して注意を示す。

熟慣の土大寮に當つて持參され度い

持　寮　品　入寮と同時に寮舎室に持寮品を出すこと

持寮期日　開寮期日は九月廿日迄つつ厳守するやう

已じ已得すして開寮期日をその旨風紀委員會委員まで報告すること

持　室　各自の室には已に鞄置した場合であるが鞄室せんとする者も一應鞄室最後出の上鞄室鞄を寮員室に出すこと

度　物　開間室は九月十一日

自習室義鞄室は義足とする人間に開寮三階三階は何時之は何時から特に厳守されたい

上級諸は鞄置部寮員室に出すこと

荷物及消毒　休暇前に荷物を預けた人は入寮後なるべく早く受取に來ること

喫煙室に預つた夜具類は消毒するが各自自常から持つて來るものは消毒中止に決定

廊下　廊下は廊下に出ることは出入せぬこと

飲酒喫煙　飲酒喫煙は不完全であるから校外者の出入は各自に於ても之をやめて

寮室注意　寮室は廊下に出ることは出入せぬこと

寮室整頓　寮室内不潔の点は要員室に申し出られたい

寮内清潔整頓も初期の心掛けが百年の新礎となるから厳密さを絶対にせぬもの、ボタン其他の落物破損も特に慎むこと

食堂　食堂は十二日、ホールは十一日、図書室は十五日、個生室は十一日より夫々開く

寮舎の塩所に注意を傾ける

已じ各自の塩所に注意を傾ける

通　學　服　已じ各自の塩所に注意を傾ける

人権尊重の精神の（人権尊重）を持寮員室に出頭すること

寮各自室に『注意巡視』及『校内巡視』を知つておくから よく見てくれ

昭和十年九月一日

寮宿寮委員

Ⅲ-7

7　新寮舎入寮について（昭和10年9月1日）

駒場移転後の入学者に対する寮内規則。「敷地広大なるも絶対正門以外より出入せぬこと」と、明記されている。

8　『向陵時報』（昭和13年2月1日）

新正門の完成に伴う一高生の感慨。

「正門が完成して愈々十七日から閉めることになった。処が定刻に遅れて来ると帳面につけるさうだ。折角門を乗り越さんものと意気洋々凱旋将軍の如く帰つて来ると、帳面に名をつけられるのでは、将軍から囚人に墜落の感じだ。」

9　『一高同窓会会報』（昭和13年6月）

越境事件当時の詳細と寮生による感想。一高の垣根は俗世との遮断を象徴するものだという主張と、その歴史を侵害した7名の処遇について。

10　『一高生活の実状』（昭和23年1月）

表紙に駒場の正門が、裏表紙に一高構内図が描かれている。

11　正門と山口進（写真）

Ⅲ-11

12　雪の正門（写真）

13　寮務室から見た光景（写真）

14　時計台（写真）

15　一高校章グッズ

柏の葉とオリーブがモチーフとなった旧制一高の校章付きグッズ各種。一高の象徴であったこの校章は、在校生そして卒業生の心の拠り所であった。

Ⅲ-12

主な参考文献

夏目漱石『夏目漱石全集』筑摩書房　昭和41年

守随憲治『真の教育者　杉敏介先生』新樹社　昭和48年

山口進『山口進版画集』形象社　昭和54年

伊那文化会館『没後20周年　版画家・山口進展』平成15年

鹿沼市川上澄生美術館編『山口進と川上澄生』平成17年

第一高等学校ホームページ

東京大学駒場博物館所蔵品展

饅頭・柏・オリーブ　山口進の画業と交友

平成26年3月3日～4月11日　（文責　丹羽みさと）

二〇一四年三月三日
東京大学駒場博物館